

# 西宮神社のえびすさまと大国さま

—「甲子」に関連して—

西宮神社宮司 吉 井 良 昭

## 1. はじめに

西宮神社は親しみをこめて「えべっさん」と称され、えびすさま（蛭子命）をお祀りしている。全国に鎮座する 3500 社～5000 社のえびす社中の総本社が西宮神社になる。本殿にはえびすさま（蛭子命）と共に、大国主命もお祀りをしている。平安時代中期にできた延喜式の中に、その当時の全国の官社の名前を網羅した神名帳というものがあり、当時のおよそ 2800 余の神社が記されている。その一つに大国主西神社が掲載されており、この神社は現在西宮神社の境内にお祀りされている。現在の西宮神社で大国様というと、本殿と境内の大国主西神社の 2 社でお祀りされている。

## 2. 「甲子園球場」の命名由来

甲子園ホテルの甲子は大正 13 年甲子の歳に建設された野球場が甲子園大運動場と命名されたことから始まる。甲子の歳とは十干十二支（十干とは甲乙丙丁戊己庚辛壬癸、十二支は子丑寅卯辰巳午羊申酉戌亥）の組み合わせの一つで、大正 13 年は甲子、14 年は乙丑となる。61 年目にまた同じ組み合わせに戻り、これを還暦という。読み方が難しく十干に五行の木火土金水があてはめられ、甲乙は「木」・丙丁は「火」・戊己は「土」・庚辛は「金」・壬癸は「水」でそこに「兄（え）」「弟（と）」が組み合わさる。甲には木があてはめられ「木の兄」で、甲子は「きのえ」に「子」なので「きのえね」という。乙丑は「木の弟」と「丑」で「きのとうし」、丙には火があてはめられ、丙午は「火の兄」と「午」で「ひのえうま」となる。

甲子園球場は甲子の歳、即ち十干十二支の 60 通りの最初の組み合わせとなり、幸先が良く、関東大震災からの復興も祈り縁起の良いこの名前を東洋一といわれた大運動場に阪神電鉄が名付けた。

阪神電気鉄道百年史、西宮市史には竣工の年の干支にちなんで甲子園としたとしか書かれていない。「甲子園球場物語」（玉置通夫著 毎日新聞記者）の命名のナゾにも同じように干支の甲子にちなんで付けたと書かれている。甲子園球場は当時鳴尾村に在り、鳴尾村誌を見てみると仮称は「枝川運動場」だったと書かれているだけである。詳しい命名の経緯は「甲子の歳」（舞坂悦治著）に載っている。舞坂さんは旧姓三崎さんで、三崎さんとは阪神電鉄の専務、甲子園球場建設の責任者であり、そのご子息が舞坂悦治さんにあたる。その本によると、単に大正 13 年が甲子の歳だからではなく、名づけ親の三崎省三さんが西

宮神社に初詣に行き、境内から町へ続く参道で横断幕や看板に「甲子の歳」と書かれたものを見て、それがきっかけで甲子園にしたことが記されている。甲子園球場の命名に西宮神社が少なからず関わっていたことがわかる。ただ西宮神社での言い伝えは少し違い、三崎さんが参拝をされた当時は本殿にその年の干支が大きく墨書されたものを掲げていたのでそれを見て、大変縁起が良いので日本一大きな球場の名前にしようと決心されたと伝えられている。

### 3. 「旧甲子園ホテル」竣工と当時の西宮神社

昭和5年4月に甲子園ホテルが完成する。西宮神社には江戸時代からの日誌が残っており、西宮神社社用日誌の昭和の頃を見てみる。大正14年に念願の西宮市制が敷かれ、昭和に入ると大変活気付いた。昭和2年には国道竣成式、図書館地鎮祭、昭和3年市庁舎地鎮祭、甲子園浜新設プール竣工祭、市庁舎・図書館の竣工祭と2、3年で市に関する建物が多く建った。昭和5年甲子園ホテルが建設された年の2月4日付の新聞に3日の節分の西宮神社の様子が書かれている。阪神電車の企画で市川右太衛門と女優鈴木澄子が福男福女として豆まきにきたため、想像を超える参拝者となり予定された栈敷に出ずに豆まきだけで帰って行ったが、この時灯籠が倒れ4人が怪我をすると大事故になったと記されている。

甲子園ホテルと西宮神社の関わりを見ると、昭和5年4月14日高松宮殿下が甲子園ホテルにご宿泊され、御機嫌伺に神主が出かけたと書かれている。6月9日東久邇殿下が廣田神社に御参拝されるために甲子園ホテルにご宿泊され、神主が西宮神社にも御立寄りをお願いに伺ったとある。4月、6月と宮様のご宿泊され非常に格式があるホテルであったことがわかる。昭和6年2月には西宮神社の職員と京都の装束店が、諸祭器具の準備のため結婚式場の視察に訪れている。西宮神社の神主が甲子園ホテル内で、昭和6年だけで19日間結婚式を挙げている。西宮神社と甲子園ホテルは創建当初から深い関わりがあった。昭和7年になると夙川にあったパイン・クレスト・ホテルにも結婚式に行くようになった。

### 4. だいこくさまとは…

#### 4-1 大国主命と大黒天

日本古来の神である大国主命とインドから入って来た大黒天が習合して、知らず知らずのうちに一般的に言われている大国様という信仰の対象が出来上がった。大国主命と大黒天は別々の神だったものが、「だいこく」という音の読みが通じることもあり、七福神の中の一人、福の神として形作られた。

大国主命は出雲大社のご祭神として有名である。古事記等神話を読むと大国主命の活躍が随所に出て来る。大国主命様は多くの名前をもち、大穴牟遲神・大己貴神・大穴持神（オオ（ア）ナムチノカミ）、葦原色許男神（アシハラシコオノカミ）色許は頑強の意、八千矛

神（ヤチホコノカミ）多くの武器を持っている神の意、宇都志国玉神 国土の神霊（国玉）の意、大物主神（オオモノヌシノカミ）奈良県の大神神社のご祭神、大国玉神等がある。

インドから入って来た大黒天はそもそもは軍神で、中国に渡り厨房の神になり、最澄が比叡山に祀ったのか始めといわれている。最澄が比叡山で願を掛けていると大黒天が現れて、「私は食料の神なので千人の方の食料を用意しましょう」と告げられたが、最澄は「比叡山には三千人もの僧侶がいるので足りない」と新たにお顔が三つある大黒天が作られ、比叡山では三面大黒天をお祀りしている。

日本の大国主命、インドの大黒天が習合しお互い影響し合い、よく知られている頭巾を被り、白い大きな袋を担ぎ、打ち出の小槌を持ち、米俵に乗った大黒像が出来上がった。米俵に乗っているのは大黒天が台所の神様であったからである。大国主命は少名比古那神と全国の国土を開発され、そのご活躍により全国の温泉には大国主命、少名比古那神が祀られている。大国主命は大地、国土の神で農耕の神でもあるので、米俵に乗っているのはこの意味も含まれている。

#### 4-2 古事記・風土記に見る大国主命の活躍

古事記によると大国主命は多くの試練を受けている。須佐之男命から受けた試練の中には、次のようなものがある。須佐之男命から矢を射るので野原で待って矢を探せと言われ、大国様が野原で待っていると、須佐之男命はそこに火を放った。大国様は逃げる事ができずにいると、そこにねずみが現れて「内はほらほら 外はすぶすぶ」と言った。内、即ち地面の中は空洞になっている、外はすばまっているがそこを踏みつけると大きな穴があるので、その穴に入って避難していると火を避けることができるとねずみが教えて、大国様は助かった。ねずみはこのような関係から、大国様の御使いとされ、大国様のお祀り日は子の日（特に甲子の日）とされている。

打出の小槌は大黒天が持っていたもので、大国様が持っている小槌は大黒天から来た物と思われる。

えびすさまは古事記の神話には登場しないが昔から祀られている神である。西宮のえびすさまと大阪今宮のえびすさまは別の神である。西宮神社は蛭子命、今宮戎神社は事代主命をお祀りしている。東京の神田明神のえびすさまは薬の神として有名な少名比古那神をお祀りしている。大国様は一人で色々な名前を持ち、一方えびすさまは一つの名前でいろいろな神様がおられる。鯛を抱かれて釣竿を持っている姿は同じだが、それぞれ違った神である。共通していることは海に関係していることである。蛭子命は伊耶那岐命と伊耶那美命の二柱から生まれ、3歳まで体が弱く天磐櫛樟船で大海原に流された。事代主命は、高天原の天照大神から国譲りを願われた時、これを承諾して海の中へ隠れてしまった。少名比古那神は海の彼方から来られ、大国様と共に国作りをされ、再び常世国に帰ってしまう。このようにえびすさまと言われる神はいずれも海と関係のある神である。

えびす、大国は昔から一対で祀られている。江戸時代の「雍州府志」によると、恵比寿・

大黒天を一雙として民家戸々に小さな像を作り棚頭に祀っている。これを恵比寿棚という。外から家に入ってくる金銀、絹、酒茶、料理はまずここにお供えする。再びこのようなことが得られるようにと祈ってのことである。室町時代の「塵塚物語」にも大黒と恵比寿を対にして或いは木像を刻み、或いは絵にかいて富貴を祈る。世間はこぞって一家一館にこれを安置し、祀らない家はどこにもないと書かれている。恵比寿・大黒は家の神として庶民が厚い信仰を捧げていたことがよくわかる。

西宮神社の御神影札(図1)は江戸時代に4代将軍家綱からの定めにより、えびすさまのお姿を描いたお札は西宮神社だけが頒布できるという版權を授かった。これによって日本国中(特に東日本)へ当社の御神影札が広く頒布されるようになり現在に至っている。西宮神社の御神影札にはえびすさまにも大国様にも透かしの模様が入っているのが特徴である。



図1 西宮神社の御神影札

室町時代にえびすさまと大国様の物語が多く出て来るが、関西ではえびすさまというと西宮神社、大国様というと比叡山の三面大黒天(大黒・毘沙門・弁財天の三つの顔を持つ)を指す。海と遠く離れた長野県に於てもえびす信仰は厚く、田の神・五穀成就の神として信仰されている。(図2)



図2 三面大黒像

風土記にも大国主命の活躍が登場する。播磨国風土記には次のような話が載せられている。大国主命と少名比古那神が重い荷物を持ち歩くことと糞を我慢し歩くことのどちらが早く降参するかと競争した。大国主命は糞の方を我慢しようと、少名比古那神は重い荷物を持とうと2、3日歩き、結局負けたのは大国主命だった。少名比古那神は疲れたと荷物の土をその場に投げた。土は「ハニ」というので土を投げた岡を「埴岡」（ハニオカ）と名付けたとされている。他には播州山崎の伊和神社の伊和大神は大国主命といわれているが、国造りをされ最後にこの場所にやって来て「国造りが終わった」「於和（オワ）」と言ったので「いわ」になったという話も登場する。

えびす・だいこくは家の中でも台所など少し低い所でお祀りするという言い伝えがある。お伊勢様や氏神様は神棚で祀られ、えびす・だいこく信仰は生活するのに身近な下の方でお祀りをするという庶民性を表わしている。（図3）



図3 低い場所で祀られているえびす・だいこく

#### 4-3 庶民信仰と橋板の大黒像

60日に一度来る甲子の日に村人が子の刻（夜の12時）まで酒食を共にするのが甲子の祭である。これを記念して建てたのが甲子塔で各地に見られる。似たようなものに庚申塔があり、60日に一度庚申の日に、体の中の三匹の虫が体から抜け天に昇り、天上の神様に虫がいた体の人の罪や悪い行いを告げ、寿命が縮まるとされていた為、庚申の日に三匹の虫が体から出ないように一晩中起きておくことが庚申の祭りである。信仰を通じて村の人が定期的に集まり、一晩中起きてみんなでにぎやかな時間を過ごして共同体意識を高めた。今でも各地でこのような信仰は続けられている。（図4）



図4 庶民信仰を伝える路傍の石碑群

えびす・だいこくの像を木で刻むのにどのような木が良いかというと、橋の端から三枚目の板を取って刻むと良いと伝えられている。橋板の三枚目は踏む人が多いため、人の魂、力が籠っている霊的な板とされているためである。藤枝市の下伝馬恵比寿神社のえびす・だいこく像は駿府城内の橋の3枚目の板にて作ったと書かれている。江戸・越後屋（三井）から見て鬼門の方角にあたる三囲神社（墨田区向島）には、代々信仰の厚い越後屋が店の建て替えの折に大黒柱で彫ったえびす・だいこく像が幾体も所蔵されている。どの木で彫ってもいいという訳ではなく、三枚目の板や大黒柱など霊的と考えられた材を使ってえびす・だいこく像は彫られていた。（図5）





図5 橋板や大黒柱で作られたえびす・だいこく像

## 5. 福の神えびすさまとだいこくさまの物語

### 5-1 打出の小槌が登場する物語

芦屋の打出小槌町の町名は比較的新しいが、小槌の話は古くからあり元禄時代の書にも既に載っている。「摂陽郡談」（元禄十四年）には、「隠里兔原郡打出村にあり。所伝云、長者一の宝槌を以て、万宝の第一とす。是則、世云打出小槌也。」と書かれている。芦屋郷土誌にも旧打出村の伝説として載っている。このことを題材に鐘の音が聞こえると打ち出したものが全て消えてしまうという脚色した民話が、江戸時代からあしやの民話として残っている。

もう少し遡ると、打出の小槌の話は平安時代からあり、その頃の書物「宝物集」には次のような話が記されている。僧侶と俗人の会話の中で僧が「あなたにとって何が一番の宝だと思いますか」と俗人に尋ねた。1人が「隠れ蓑」と答えた。隠れ蓑は隠れて人の物やお金を盗ることができ、素晴らしい人がいれば近くに行き話を聞くことができるからだという。他の人がそれは盗人がすることだから宝ではないと言った。次の人は「打出の小槌」と答える。広野で住みやすい家、おもしろい妻や男、言うことを聞く従者や馬牛を（食べ物、衣類などを人の物を盗るのは悪いことだが）自分の思いのままに出すことができる打出の小槌が一番の宝だと言った。これに対して打出の小槌はめでたい宝ではあるが、鐘の音を聞くと全て一瞬にして失ってしまう。めでたいと思っても、広野で一人裸になったことと変わりがない。元々貧しいなら我慢もできるが、一度宝物を手に入れて無くなってしまふことは元々貧しいことより耐え難いことだ、無用の長物だと言っている。このように

話は続くが、世俗の物には全く功罪両方あり、世俗を超えた仏法が一番の宝であると僧が説く仏教説話の一つだが、平安時代に既に打出の小槌が登場している。

「かくれ里」は西宮のえびすさまと比叡山の三面大黒天が大ゲンカをする話である。西宮神社の御供え物をだいきくさまの遣いのねずみが齧った。それを見た狢犬がねずみを噛んだ。それに怒ったねずみが社殿の鳥居や扉を齧った。えびすさまが怒り、釣針でねずみを吊り下げ懲らしめた。すると、えびすさまの兄の月読宮が茶の湯に伊勢からやって来るとねずみが聞き付け、その道具を使えないようにねずみが齧った。えびすさまは大変怒り、比叡山のだいきくさまに遣いを出し「悪しきねずみ達を打ち殺せ」と申したところ、だいきくさまは「申し訳ない。茶臼と挽木は元に戻すので堪忍して欲しい」と打出の小槌を振って以前の臼や挽木より立派な物を出した。えびすさまは「いたずら者を抱えて二度とさせないと謝るのが道理である。徒然草にも「なくてよいものに国に盗人、家にねずみ」とあり災いのものだ。元の茶臼を返しなさい」とさらに怒った。だいきくさまは「悪いねずみにも取得はある。干支の中にも入り、十一月には子祭もありご利益がある。この道理を知らずに何を言うか」とまた怒った。えびすさまは竜宮城に行き魚を集め、比叡山を攻めようとした。西の宮、須磨の浦、一の谷、渡辺、福島、江口、山崎、八幡辺りのねずみは比叡山に一斉に逃げた。えびすさまは京都四条室町恵比寿町、だいきくさまは二条河原町大黒町に陣取り戦を始めようとしたところ、大和国達磨寺に参拝をするために布袋和尚が通りかかり、両陣に「神仏の二道は争いが無いことが本である」「福の神が争うと貧乏神の幸になる」と分け入り、両者仲直りし、えびすさまとだいきくさまは仲が良過ぎるために諍いになるので「親しい間にも分け隔てを建てよ、垣根をせよ」「遠きは花の香」、近いものはなかなか分りにくい、遠くのは分りやすい、少し離れて付き合うようにとだいきくさまとえびすさまの御殿の間に隔ての板を打った。和睦の印にだいきくさまと布袋様が相撲を取り、えびすさまは行司をしたという話である。

打出の小槌は願えば何でも出て来るが、そこには人間の心が無いといけない。人間の心を見捨て物を出しても宝では無い。心が通じ合うことが大切だという話である。

次に「大黒舞」、室町末期～江戸初期の立身出世の話。大和国吉野に住む大悦という正直者はだいきくさまとえびすさまのおかげで出世するが、あまりにも裕福になり泥棒が入って来た。その泥棒をだいきくさまとえびすさまが打出の小槌や魚釣竿で見事にからめとった。大悦はやがて中納言の姫君と結ばれ栄華を誇る。

大国様は打出の小槌で色々な物を出し、七福神の中でも富貴の神様で、えびすさまは正直・清廉の神様である。えびすだいきくとして二つ並んでお祀りされるということは、誰もが富貴を願うがやましい心があってはいけない。富貴を願いながら、えびすさまの清廉な心を持ち合わせる事が大切なのではないか。打出の小槌は願えば何でも出るが、鐘の音で全て消えてしまう。貧窮より衰苦は耐え難いことと分っていれば、宝の小槌は使いづらいものである。夢として持っていることは良く、えびすさまの正直な心を持って、一步一步進むことが富貴に繋がる道だと教えている。



## 5-2 甲子園ホテルの装飾

甲子園ホテルの装飾の打出の小槌には水玉模様が付いている。実際に打出の小槌から水が流れ、外には打出の小槌の噴水があったことから、打出の小槌に象徴される大国様の富貴に対して、水はやがては川に注ぎ大海に流れる、即ち海の神様であるえびすさまに繋がってくる。従って、打出の小槌に水玉模様は大国様とえびすさまを表現しているのではないか。両神揃って甲子園ホテルの守り神になっている。甲子園ホテルは当初、甲子園の海浜ホテルとして海辺に建つ予定だったが、帝国ホテルから林愛作氏が訪れ予定の場所から変更され現在の位置に建設したと阪神電鉄百年史に書かれている。海辺に近い所はえびすさまのお力、内陸に入った場所は大国様のお力が強い所であることから、何か甲子園ホテルには大国様を中心にえびすさまとのお二人の力がずっと影響しているように感じる。

## 6. 大国主西神社と西宮神社

大国様を祀る大国主西神社（図 6）が西宮神社の境内にあるが、平安時代中期にあった大国主西神社という説がある。現在の西宮神社は明治時代までは西宮えびす神社という名称であったが、明治時代に入ると 2 ヶ月間だけ大国主西神社と改称されたことがある。



図 6 西宮神社境内社 大国主西神社

えびすさまの神社が大国様の神社になったということ。明治時代に官社制度ができ、江戸時代までは廣田神社と西宮神社は同じ神主で一体となって運営されて来た。明治時代になり別の神社として分離され、廣田神社はその由緒から官幣大社になり、西宮神社は県社となった。えびすという名前が仏教的な意味合いがあるとの誤解から、えびすを名前として付けられないということになった。そこで式内社「大国主西神社」として名前を変え 2 ヶ月続いたが、西宮神社と大国主西神社は明らかに別々の社ということで元の西宮神社に戻った。

平安時代「延喜式神名帳」に大国主西神社が載せられているが、鎌倉時代以降は全くその神社名は挙がらなくなった。代わりに平安時代後期から登場するのがえびす神社である。

えびす神社は大国主西神社から「西」を取って「西のお宮さん」西宮神社といわれるようになり、現在の西宮神社は大国主西神社ではないかという説もある。このようなこともあり、明治時代に一時大国主西神社に名前を変えることになった。

えびす宮総本社たる西宮神社が、明治維新後の混乱の中、わずかな期間ではあるが大国様の神名を冠した神社名を名乗ったことは、たいへん興味深いことであるが、庶民のえびすさまへの信仰はそのような変遷に影響されることなく続いている。

## 7. まとめ

「画竜点睛」のことば通りに、西洋式ホテルに「和」を取り込んだ甲子園ホテルは福の神大国様の打出の小槌を象徴的に配することによって日本を代表するホテルとなった。

加えて、福の神として大黒様と対するえびすさまは直接的には表現されていないが、海を領知するえびすさまにつながるように、水玉模様や噴水が装飾、配置されているのではない。

我が国に継承されてきた見立てや留守絵の手法が思い起こされる。

設計者と建造物、この両者を貫く「祈り」が福の神によって表現されているのだろう。

(2016 年 11 月 19 日、生活美学研究所本年度甲子プロジェクト研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 黒田 智子

### 【参考文献】

2005 『阪神電気鉄道百年史』

『西宮市史』

玉置道夫 2004 『甲子園球場物語』 文藝春秋

鳴尾村誌編纂委員会 2005 『鳴尾村誌』 西宮市鳴尾区有財産管理委員会

舞坂悦治 1983 『甲子の歳』 ジュンク堂書店

1930. 2. 4 付大朝阪神版』

1688 『雍州府志』

1552 『塵塚物語』

1701 『摂陽群談』

1963 『芦屋郷土誌』

1999 三好美佐子 『あしやの民話』

平康頼 1177～81 『宝物集』

『かくれ里』 御伽草子

室町末期～江戸初期 『大黒舞』